

サヌカイト以前

山口 卓也

はじめに

近畿地方の旧石器時代研究史は、「岩宿」以前にも直良信夫氏による1931年の「明石原人」発見という重要な日本旧石器時代研究上のエポックを有しており、これを考慮するとすでに68年の歴史を有している。また、大正年間の京都大学などによる国府遺跡の発掘調査も、ヨーロッパ旧石器との対比を意図したことに契機があったことは、思い出されねばならない。近畿地方は、戦後、「岩宿」以後には、鎌木義昌による瀬戸内地域でのいくつかの調査と連動して国府遺跡の発掘が行われてから、同志社旧石器文化談話会の二上山北麓でのサヌカイト原産地の踏査・研究やいくつかの研究史上重要な遺跡の発掘調査など、いくつかの節目を経ている。これらは、近畿地方独自の動きとして発生した場合と、近畿地方の研究動向の自立的な展開によるものではなく他地域の研究動向を受けたものであったり、またその連鎖が遙かに遅れて派生したりする場合も見られるものが含まれている。旧石器時代研究の根幹を揺さぶった旧石器遺跡捏造事件も、次第に影響を及ぼしていくであろうし、旧石器時代研究者の研究視点も、実際に大きな転換を迎えたと実感している。近畿の旧石器研究者の意識は、必ずしも捏造問題を他人事と考えていたわけではない。

本稿では、近畿地方の研究が、後期旧石器時代を中心に発見や調査が集中していく過程で、サヌカイト石材という地域的優占石材に研究意識が収斂されたことを指摘し、今後の旧石器時代研究を既成概念を払拭して再開するための簡単な整理を行っておきたい。

サヌカイトという石材開発が後期旧石器時代初頭に行われた可能性が高いこと、サヌカイト石材と石器文化の高度な構造化があったこと、それより前には、そのような石材と石器文化の構造化はなかったと仮説できることを指摘したい。この点で、旧石器時代全体が、非サヌカイトとサヌカイトの両者を含む「以前」として把握される。

1. 近畿地方における旧石器研究前史

近畿地方において、旧石器時代の存在が意識されたのは、奇しくも1917年から始まった大阪府藤井寺市国府遺跡（浜田1918）であった。喜田貞吉氏により「欧州発見の旧石器の或者ににたる形式」の大形無細工な石器が、国府遺跡の深くから出土したとの福原潜次郎氏の情報が浜田耕作氏にもたらしたことにより、浜田氏は国府遺跡の調査目的を旧石器の包含を確かめることにおいていた。新しいとされた層位より間層をおいて深いこと、獣骨を伴うらしいことから、想定されたのは、ヨーロッパの前・中期旧石器のタイプリストに登場するような石器群であったようだ。しかし後には、大量に出土する縄文人骨と多様な埋葬形式に目を奪われて、旧石器の探索は失念されてしまう。

さらに1931年4月18日、直良信夫氏が兵庫県明石郡大久保村西八木海岸にて一片の腰骨を採集した。発見以前の1927年11月26日、同海岸（屏風ヶ浦）にて石器（瑪瑙）を発見すると共に、旧象化石（臼歯）破片も発見し、直良は、日本にも旧石器時代が存在していたと確信するようになっている（直良1931 a・1931b、直良1995、春成1994）。

その後、この「明石人」の腰骨や、直良信夫の採集した「旧石器」については、春成秀爾をはじめ、考古学や人類学の分野で多くの調査や様々な議論が展開され、1985年の西八木の発掘調査

へとつながった(春成1987)。発掘の結果、自然科学的分析により「明石人」腰骨算出層は約4万年前の西八木層であろうとされ、また人為とも見られる木片の出土をみている。しかし、評価は、腰骨が戦災で失われたこと、出土地点自体が海蝕によって失われていることから、今日においてもその決着を見ることはない。

このように、近畿地方における旧石器時代の研究は、ヨーロッパの旧石器洞窟遺跡の例が印象づけられたのか、哺乳動物化石と石器との関連を当初から念頭に置いて、浜田耕作、直良信夫らによって、その科学的な考古学としての研究が開始された当初から意識された点は、近畿地方の旧石器研究前史として、強調されるべきである。

近畿地方でも、宮城県の「遺跡発掘」と競うように近年後期旧石器以前を伺わせる調査が続いていた。

1997年には西八木海岸から東約2.5kmの藤江川添遺跡(明石市)から瑪瑙製の「ハンドアックス」様の石器が発見された。稲原昭嘉はこの石器について、縄文時代に属する溝状遺構下部の砂礫層中で検出したが、「形態的特徴、使用石材等から後期旧石器時代(今から約3万年前)をさかのぼる様相を呈したものとみなされ、旧人段階の人類の存在を強く裏付ける資料となった」と報告した(稲原1998)。直良信夫の採集した「明石人」骨や「旧石器」の出土が想定されている地層と、今回の「ハンドアックス」が出土した礫層との関係は、今後の大きな課題であるが、今回の報告は、今後の「明石人」の新たな展開を予測させる一方、近畿地方における「前期(中期)旧石器」の存在を前進させることが、我々にとっても大きな課題となっている。

また、大阪市文化財協会は長原遺跡や山之内遺跡で、約10万年前の層準まで発掘を行い、ナウマン象などの大形動物の歩行痕化石を検出しており、同一水平面に人類活動の痕跡を見いだす試みを続けている。

日本の土壌環境で、自然遺物の残存をほとんど見ない後期旧石器時代の遺跡例を蓄積してきた研究史は、実は大きな研究視点の欠落を発生させてきたと考えざるをえない。旧石器時代が更新世であり、そのほとんどが氷期であったこと、地形環境や生息動植物に大きな違いがあったこと、そもそも人類段階が現生人類と同じでないかも知れない段階を対象としている点は、たとえ、遺跡から石器しか出土しない調査例を積み上げようとも、旧石器研究者が、それを解釈しようとした時点で視野に入れておく必要があるといえる。

2. 近畿のサヌカイト石材と瀬戸内系旧石器の構造

直良信夫の明石における調査研究以後、戦前の近畿地方では旧石器時代に関する研究は皆無であった。鎌木義昌氏は、岩宿以降、1954年の香川県井島遺跡・岡山県鷺羽山遺跡の発掘調査を皮切りに、各遺跡の発掘調査や表面採集資料調査など、瀬戸内海地方の「先土器時代」文化編年の調査研究を本格化させた。岩宿から約8年遅れて1957・58年、瀬戸内海地方の東に位置する国府遺跡(大阪府)の調査では、「相当量の横剥石核、横剥刃器、ナイフ形石器」を発掘した。そして「特殊の技法による石器製作過程が判明し、瀬戸内技法と名づけ」とともに、「この技法によってできあがる剥片を翼状剥片とよび、完成したナイフ形石器を国府型のナイフ形石器」と呼んだ(鎌木・高橋1965)。ここに「瀬戸内技法」・「国府型ナイフ形石器」が提唱され、その後今日に至るまで、近畿地方の旧石器時代研究の技術論的研究の基礎となった。

また、1959年の太島遺跡（兵庫県家島群島）の発掘調査では、「井島Ⅰ石器文化」の単純遺跡であると評価し、「その純粋性と独立性が再確認」され、豎場島遺跡の層位的な調査成果により、各型式の前後関係が検討された。そして、「ほぼ国府型ナイフ形石器、宮田山型のナイフ形石器、井島Ⅰ石器文化という順序があきらかにされ」、瀬戸内海での「先土器時代文化編年表」を発表した。結果的に、ナイフ形石器の時間的変遷は、「瀬戸内技法の成立からその衰退へ」の変化とともに、ナイフ形石器自身の「大形から小形」への型式学的な変化がクローズアップされた。

層位的保証の乏しい近畿地方と瀬戸内地方において、以後この編年観が有効となり、鎌木らの編年案を踏襲する形で、様々な編年案が提起され（松藤1980、山口1983、久保1989、佐藤1989）、技術論的側面の「瀬戸内技法」とともに、近畿・瀬戸内地方の旧石器文化研究の基礎となったが、特に近畿地方においては層位的出土例が増加する80年代半ばまで、その有効性そのものについての検証はなされなかった。

サヌカイトを占有石材とする瀬戸内系旧石器は、始良Tn火山灰降灰直後に国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法に示される「極相」に達する。この「極相」期には、サヌカイト原石産地周辺から遠隔地への「石器生産の異所展開」が徹底して行われる（山口1994）。この異所展開に対応する技術適応が瀬戸内技法であり、国府型ナイフ形石器であった。後期旧石器初頭には、サヌカイト石材産地の開発、台形様石器素材の供給を板状の剥片から行うという、瀬戸内系横長剥片剥離技術伝統の基礎が成立している。剥片を寝かせて、さらに剥片を剥離する点で、これは多分に分割技法的な技術体系であったのだろう。前半期で台形様石器からナイフ形石器に主体変移する中で次第に横長剥片剥離技術として個別に出現した技術属性が組み合わさって、最終的に瀬戸内技法が成立するのであろう。

やはり石材の移動についても、同様の経過を辿るようで、初期には石核素材や石核、目的剥片など多様な形の搬出・搬入形態が、極相では斉一的な様相が強まっている。二上山は、長原遺跡から10kmほどにあるが、14層段階では遺跡内への石材搬入は円礫だけではなく、板状剥片も持ち込まれている点は、板井寺ヶ谷遺跡下位文化層と同様である。初頭の勝手野遺跡や前半期の七日市遺跡や板井寺ヶ谷遺跡下位文化層でサヌカイト製石器群が検出されるのは、この時期の瀬戸内系旧石器の移動距離がすでに活発化していることを示している。近畿中央部の石器群の完成を、国府型ナイフ形石器と瀬戸内技法に代表される極相期に限定することも可能であるが、むしろ瀬戸内系旧石器文化の伝統として、台形様石器群を主体とした初頭の石器群から極相まで、一貫して理解した方が、技術基盤の一貫性を損なわずに把握が容易になるのではなかろうか。すなわち、近畿中央部のサヌカイト製瀬戸内系旧石器の成立は、後期旧石器時代の開始と見なせるのではなかろうか。

この原石産地と遠隔地の、石器製作工程の異所展開が、主にサヌカイト噴出源上の二上山北麓と四国、讃岐北部の原石産地を起点として行われたことを考えてみると、まず、どちらも噴出源の山塊であることが指摘できる。また、かつてそれぞれがサヌカイト石材を下流域に転石として流下させた点でも同様であった。古大阪川系の二上山北麓は標高120m前後で、その原石産地遺跡の立地は、通常近畿地方中央部の遺跡立地とは景観的に異なることが指摘される（山口、91）ちなみに、讃岐北部の金山は標高200m、国分台は標高200mである。讃岐北部や二上山北麓のいずれも河川上流に位置する噴出源産地であり、立地の異なる山塊中に原石産地遺跡群が形成されること、石器生産に比重のかかった遺跡の存在の予測されることから、大きく傾向を捉えるなら、原石産地－遠隔地間の関係は、河川水源と下流域の関係に置き換えることも出来よう。

筆者はすでに、サヌカイト製瀬戸内系旧石器の主分布域が山地や丘陵ではなく、むしろ低位な段丘や低地にあることを指摘した。当時の主活動域が、近畿地方中央部から瀬戸内地域の低位な地形単位に広がっていたと考えるのである。

サヌカイト石材と一体化した瀬戸内系旧石器の、成立以前のあり方を予測するならば、地域的適応の特化の始まる以前、おそらく中期旧石器の存在を予測しなければいけないであろう。この段階においても、当然主活動域はより低位な段丘上や低地であったと推測する。この段階において汎日本的な石器群の動向と等しく石材選択は多様であり、サヌカイト石材は河床や浸食崖において採取可能な一石材であったにとどまるであろう。

次第に中期旧石器時代から後期旧石器時代の移行に際し、人類活動域は拡大し、経験的に生まれるサヌカイト石材への嗜好の結果、河川の転石採集が進み、転石の流下した中流域から上流域へと石材採集活動が遡上すると仮説できる。

その結果発見された噴出源サヌカイト石材原産地、二上山と讃岐北部は、どちらも彼らにとつては、低位とはいえ従来の活動領域をわずかに越えた山塊中に位置していた。

次第にサヌカイト石材への嗜好・偏執が高まり、主活動域に接したサヌカイト石材産地へのサヌカイト石材の直接的採集活動が行われる。この結果、非サヌカイト石材への依存度が低下し始める。石材供給活動が集団の回帰運動に組み込まれるという画期が想定されれば、サヌカイト石材への依存拡大と相まって瀬戸内における後期旧石器的な諸相の成立を推測させうる段階となるであろう。

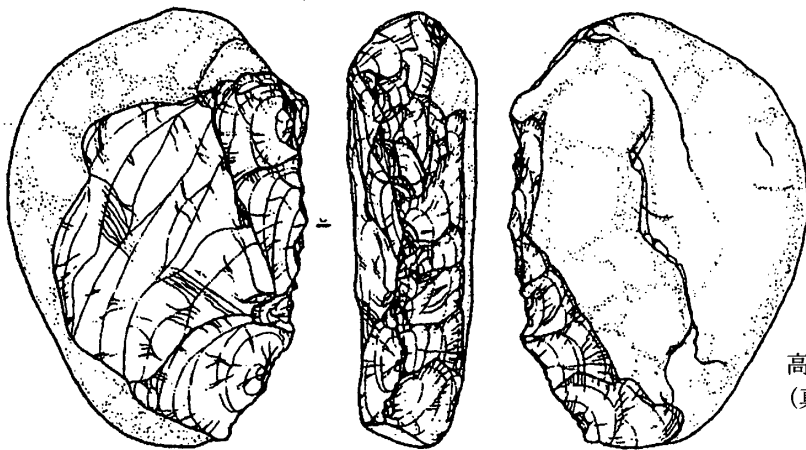
サヌカイト石材の原産地での回帰的採集活動と遠隔地での非サヌカイト石材の現象は、石器生産技術における「適応」を促し、石器製作工程における異所展開が始まる。これがいわば剥片素材の石核から複数の剥片を生産するという二段階の工程を行う、瀬戸内系横長剥片剥離技術となる。この技術的「適応」は、特定産地の石材が結果として流布した結果と考えるより、すでに存在する主活動領域全体で限定された産地の石材を意図を持って使用するために進められたと考えた方が妥当であろう。この点で、筆者はサヌカイト石材の執着的使用、瀬戸内系横長剥片剥離技術の出現、石器製作工程の異所展開といった特徴の出現から、安定した地域社会の存在を推定し、近畿地方中央部・瀬戸内地域における後期旧石器時代の始まりを画期したいと考えている。

繰り返しておくが、サヌカイト石材を用いた瀬戸内技法・国府型ナイフ形石器は、あくまで瀬戸内系旧石器の「極相」であり、石器生産におけるサヌカイト石材とその供給を回帰移動に組み込んだ瀬戸内系旧石器の様相の一つに過ぎないのであり、国府型ナイフ形石器・瀬戸内技法のみに瀬戸内系旧石器を代表させることは、後期旧石器時代の画期から瀬戸内系旧石器の終焉までの多様な「適応」を視野に入れない危惧があるといえようか。

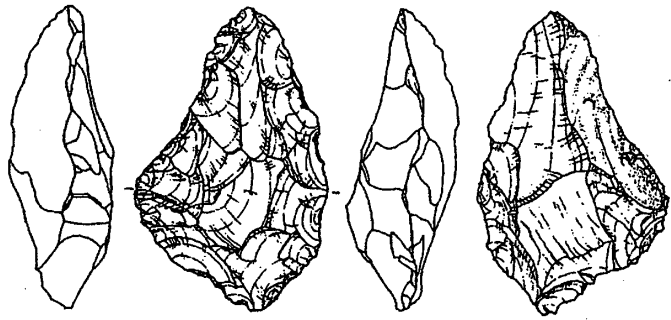
一方、近畿地方北部の在地石材の縦長剥片剥離技術に基盤を持つ石器群は、その内容から考えて中国山地帯内に広く認められる石器群と同様であると認められる。広く見れば汎日本的な広がりを持つ台形様石器群、ナイフ形石器群として段階を踏んで変遷している。

台形様石器群が、近畿地方の後期旧石器時代初頭において、技術基盤の異なる二系統があったことになるが、この点については中期旧石器時代から後期旧石器時代への変移と地域への適応・定着、地勢的な問題と密接に関わってくることになろう。

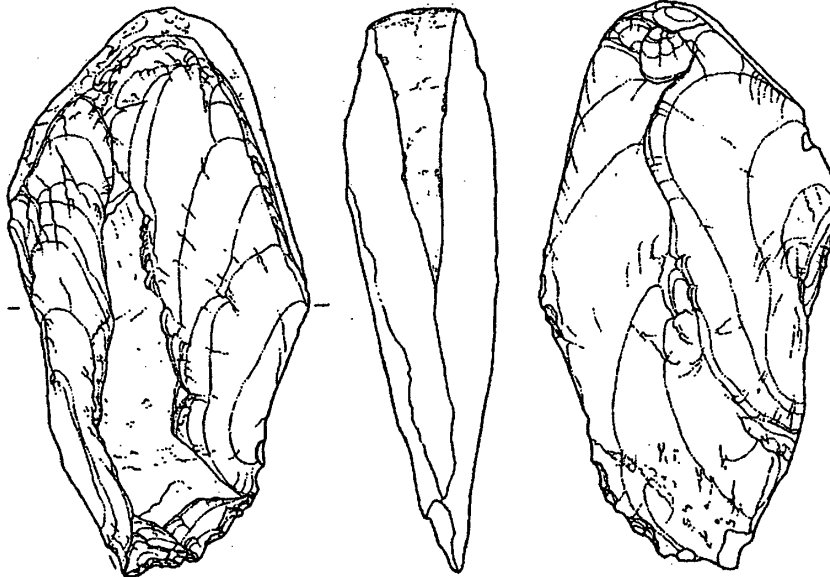
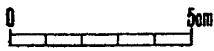
3. 近畿地方の中期旧石器時代について



高砂市魚橋の石器
(真野修・稲原昭嘉1987より)



明石市藤江川添の石器
(稲原昭嘉1998より)



関宮町三宅草刈り山の石器
(高松龍暉・山口卓也1985より)



第1図 各地の石器

近畿地方における中期旧石器時代の存在については、本来はその中期旧石器時代とされるものを残した当事者が、どのような段階の人類存在なのかから検討する必要がある。この検討抜きには、石器がどうだから、層位的にほかより古いから、といった議論は、旧石器時代史として意味を持たない。ただ単なる石器の人格化を進める行為となろう。

しかし、近畿地方において、化石人類遺存などの検討は、現状であり得ないので、まずは、先に見た後期旧石器的な高度な「構造化」を果たしたサヌカイト製瀬戸内系旧石器以外の、「異質な」資料の検討から始めようとする。客観的根拠としては、やはり、非サヌカイト資料で瀬戸内系旧石器以外の、広域火山灰編年による層位的な資料の検出であろう。

さきに見たように、古くは浜田耕作氏や直良信夫氏の追求から、異質な資料を認識することから始まっている。同志社大学による二上山北麓でのチョッパー状石器など非ナイフ形石器文化資料の異質資料の注目は、先駆的な着目（同志社大学旧石器文化談話会1974）であろう。明石市藤江海岸の発掘調査（春成編1987）は、遺物の認定に異論が残るが、生活面を伴わない堆積環境での遺跡存在に注意を促した点は重要である。

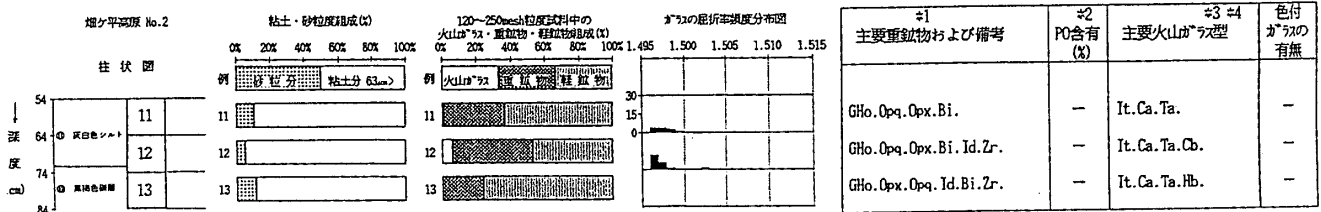
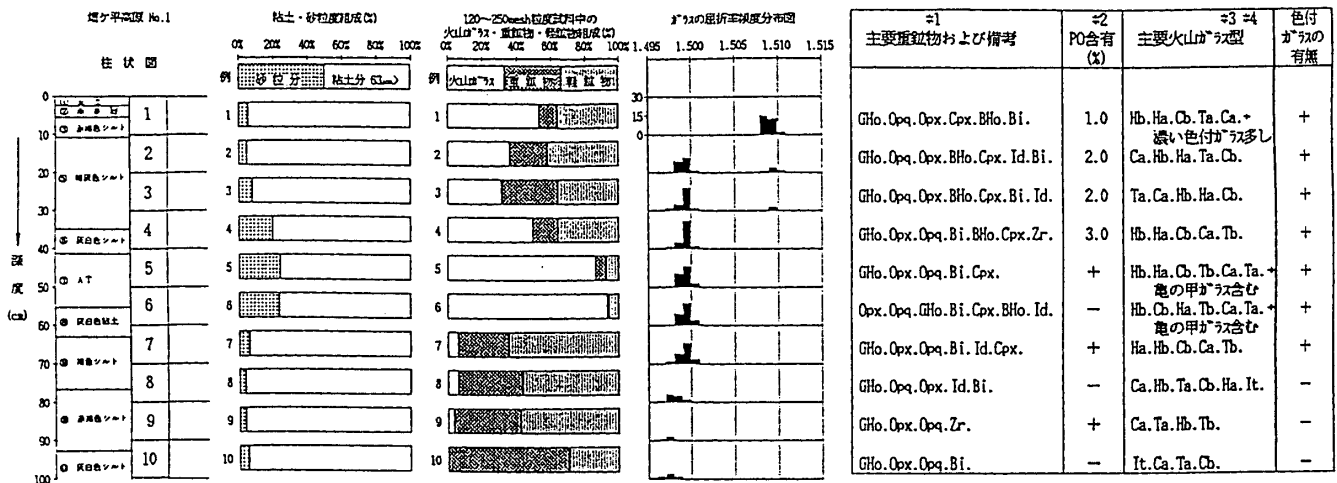
中期旧石器が発見されるとすれば、将来層位的環境の良い北部で層位的根拠を持って発見される可能性が考えられる。中期旧石器時代の石器群は、石材開発の時期から推測して非サヌカイト石器群であろう。層位的な条件の劣悪な近畿地方中央部で、考古学的な判別を行い、中期旧石器を分別するなら、この地域での非サヌカイト石器を検討するのが理にかなっている。

近畿地方の異質な資料について紹介しておく。いずれも明瞭な時期判定が出来ない資料であり、錯誤資料の可能性も排除できない。高砂市魚橋のため池底に露頭した洪積段丘（下位）から単独で採集された石器（真野・稲原1987）、凝灰質頁岩製である。明石市藤江川添の石器（稲原1998）はメノウ製で、古河床の礫層に含まれていたものである。地層の時期判定は出来ていない。転磨が少なく、近傍の河肩から運ばれたと考えられている。春成秀爾氏による藤江海岸の発掘成果との関連で重要である。兵庫県関宮町三宅草刈り山の石器（高松・山口1985）は、八木川南岸の丘陵からローム状の黄褐色土層中から出土したもので、泥岩製である。出土地は始良Tn火山灰よりも深い可能性がある。

近畿地方中央部以南では、段丘上に始良Tn火山灰の安定的な堆積すら見いだすことは困難で、さらに中・前期旧石器相当期の広域火山灰を検出することはほぼ困難である。一方、今のところ古い石器群は検出されていないが、兵庫県北部の高原には、将来条件を満たしうる火山灰層が見いだされる可能性が高い。兵庫県美方郡温泉町の畑ヶ平高原では、1988年に開墾予定地に試掘が行われ、その基本的な土層堆積が把握された。

畑ヶ平高原では、基本的な層序は、上から1：表土、2：漸移層、3：赤褐色火山灰、4：暗灰色火山灰、5：灰白色火山灰、6：黄色火山灰、7：灰白色粘土、8：褐色火山灰、9：赤褐色火山灰、10：灰白色火山灰、11：黒褐色礫層（火砕流？）となり、1-10層で深度約100cmとなる。

この基本層序は、(株)京都フィッシュン・トラックによって火山灰・土壌分析が行われ、第Ⅱ図のような成果が出ている。第3層がアカホヤ火山灰、第6層が始良Tn火山灰純層、その間に大山ホーキ火山灰の降灰を含んでいる。また、始良Tn火山灰下では、広域火山灰の降灰は認められず、至近火山から供給された堆積である可能性が示唆された。いまのところ、直近の広域火山灰であるDKPの降灰は認められていないので、その精査は必要であるし、さらに局地的な火山



畑ヶ平遺跡 (柱状試料 畑ヶ平高原

10 cm 間隔)

試料採取地点土層模式柱状図および分析結果

* 1 主要重鉱物の略称と鉱物名

O1: カンラン石 Opq: 斜方輝石 Cpx: 単斜輝石 GHo: 緑色普通角閃石 BHo: 褐色普通角閃石
Bi: 黒雲母 Ap: アパタイト Zr: ジルコン Id: イディングサイト Opq: 不透明鉱物

* 2 PO: プラント・オパール含有率 or 有無

* 3 主要ガラス型の名称 (吉川, 1976)

Ha, Hb: 扁平型 (バブルウォール型) Ca, Cb: 中間型 (軽石型) Ta, Tb: 多孔質型 (軽石・繊維状型)

* 4 (吉川, 1976) 以外のガラス型の略称

SG: スコリア質ガラス IT: 不規則型

第2図 畑ヶ平遺跡の火山灰分析
(京都フィッシュントラックによる)

性堆積物供給源の確認と年代の把握も必要である。なお、基底層の11：黒褐色礫層が扇山の火砕流であれば、まず最初に扇山の火砕流年代の把握が必要であろう。扇山の火山活動と始良Tn火山灰降灰までの時間差が分かれば、畑ヶ平高原での旧石器人の活動可能時期が限定できる。さらに始良Tn火山灰直下の灰白色粘土層は、下位火山灰層の長期にわたる露頭による風化層とも考えられることから、必ずしも始良Tn火山灰降灰直前の時期を示すわけではない点は注意したい。近畿地方北部において、先の捏造事件の舞台となった宮城県下と同様の、局地的火山灰編年網の構築の可能性が広がっている。

畑ヶ平高原のような堆積環境は、但馬地方北部に広く認められるので、今後はこのような場所での遺跡発見の努力が必要となろう。

おわりに

層位的な堆積環境が近畿地方中央部でよくなく、そこから発見される旧石器がほとんどサヌカイト製で、後期旧石器の高度な構造化を果たした瀬戸内系旧石器なので、旧石器はサヌカイト製という先入観が広く定着している。しかし、近畿地方の後期旧石器初頭の石器群の様相が、かならずしも単相ではなく、中・南部でのサヌカイト製石器群と北部での在地石材の石器群に、すでに分化していることを指摘した。このサヌカイト石材への適応は、ナイフ形石器群の定着に先立って行われている。このことは、近畿地方でのサヌカイト石材の開発が、後期旧石器時代への移行と連動して行われたことを示唆している（山口1998）。

今のところ、明らかに中・前期旧石器と見なせる石器群は認められないが、近畿地方にも、旧石器時代の資料として異質な資料の存在がある。いずれも単独であり層位も不十分で、現時点での評価は困難であるが、今後の例増をまって評価したい。また、近畿地方北部には、広域火山灰の検出を果たしていないものの、始良Tn火山灰下に厚い火山性堆積物がある高原が広がっていることが知られた。

捏造問題発覚以降の近畿地方での、サヌカイト以前の研究の状況をまとめた。

近畿地方における中期旧石器時代は、その堆積環境を問題とする以前にもどり、他の地域と同じように、捏造発覚以前と同様に不明である。他地域と比較して研究上不利な環境にあるわけではない。中期旧石器時代の担い手が、どんな人類段階であったかは重要であるが、今日本列島でその議論は成り立たないし、すでに考古学の範疇から外れた議論を求められるだけであろう。日本の旧石器研究者にとって、資料の積み上げから、考古学的に迫る方法しかありえない。

近畿地方で後期旧石器よりも「古い」可能性のある遺跡を見つけようとするれば、それはサヌカイト以外の石材を使用している、後期旧石器時代的な石器群でないものの中から見つけられるであろうと思われる。既知の資料についても、資料と出土地点の再検討と評価が必要である。はたして、中期と後期の間、サヌカイト以前（よりまえ）に、越えられない「断絶」があるのであろうか。そしてそれは、サヌカイトの開発に関わっているのであろうか。

引用・参考文献（文献については一部省略した）

- 稲原昭嘉 1998 「藤江川添遺跡出土の旧石器」『旧石器考古学』第56号 旧石器文化談話会
鎌木義昌・高橋護 「瀬戸内海地方の先土器時代」『日本の考古学Ⅰ 先土器時代』

- 絹川一徳 1999 「大阪市長原遺跡14層出土石器群について」『『櫃石島技法』の再検討』第23回近畿旧石器交流会資料
- 久保弘幸 2002 「第3章 勝手野遺跡（後期旧石器時代）の調査」『勝手野古墳群』兵庫県教育委員会
- 佐藤宏之 1992 『日本旧石器文化の構造と進化』
- 佐藤良二 1989 「近畿地方におけるナイフ形石器の変遷」『旧石器考古学』第38号 旧石器文化談話会
- 高松龍暉・山口卓也 1985 「但馬地方における旧石器について（2）」『兵庫考古』第21号 兵庫考古研究会
- 奈良県立橿原考古学研究所 1996 「三郷町 峰ノ坂遺跡発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』1995年度
- 直良信夫 1931a 「播磨国西八木海岸洪積層中発見の人類遺品（一）」『人類学雑誌』第46巻5号
- 直良信夫 1931b 「播磨国西八木海岸洪積層中発見の人類遺品（二）」『人類学雑誌』第46巻6号
- 直良三樹子 1995 『見果てぬ夢「明石原人」—考古学者直良信夫の生涯—』
- 浜田耕作 1918 「河内国府石器時代遺跡発掘調査報告」『京都帝国大学文科大学考古学研究報告』第2冊
- 趙哲済・藤田幸夫 1991 「中谷芳蔵氏による建設工事に伴う長原遺跡（NG90-62次）調査略報」『平成2年度大 阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』大阪市教育委員会・（財）大阪市文化財協会
- 同志社大学旧石器文化談話会 1974 『ふたがみ』
- 春成秀爾編 1987 『国立歴史民俗博物館研究報告』第13集
- 真野修・稲原昭嘉 1987 「兵庫県高砂市阿弥陀町魚橋採集の石器」『旧石器考古学』第35号 旧石器文化談話会
- 真野修・稲原昭嘉 1988 「兵庫県高砂市曾根町馬坂採集の石器」『旧石器考古学』第37号 旧石器文化談話会
- 松藤和人 1985 「瀬戸内技法・国府石器研究の現状と課題」『旧石器考古学』第30号 旧石器文化談話会
- 山口卓也 1991 「板井寺ヶ谷遺跡をめぐる諸問題」『板井寺ヶ谷遺跡—旧石器時代の調査—』
- 山口卓也 1991 「近畿地方における旧石器時代遺跡の立地—遺跡立地の差と地域性の発生について」『関西大学考古学等資料室紀要』8
- 山口卓也 1994 「二上山を中心とした石材の獲得」『瀬戸内技法とその時代』中・四国旧石器文化談話会
- 山口卓也 1998 「古瀬戸内とサヌカイト石材」『網干善教先生古希記念考古学論集』
- 山本誠・山下史朗・守岡克倫 1998 「瀬戸内技法成立前夜の一様相」『旧石器考古学』第56号 旧石器文化談話会